

説教 『恐れを中心とする』山本 護牧師
聖書 ヨブ記 25:2~4/使徒言行録 2:43~47

最初期の教会生活が記されている箇所(使徒 2:43~47,4:32~35)。「信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、財産や持ち物を売り、おのおの必要に応じて、皆がそれを分け合った(2:44~45)」。今、そんな教会を構想したらどうか。「理想的じゃないか」、「息苦しそうで嫌だ」、「意図してできるものではない」、「ベーシックインカム先取りになる」など様々な声が聞こえる。自分はどうなのか。公平な分配はいいけれども、生来の身勝手さが保証されるか。実際、馴染まない者も早々に現れた。

アナニア夫妻は売った土地代金を過小報告し(5:1~2)、聖霊を欺いた報いを受けた(5:3,5,9,10)。財産の共有は強制ではなかったが(5:4)、半ば暗黙の規範になっていたのだろう。同志の歓心を買うために神を欺いた報いは深刻だ。共有生活にはそうした危機因子が生じ、簡素な初代教会においてさえ長くは続かなかった。定住以前の生活形態なら、むしろそれが普通であったろうが(出エジプト 16:17~18)。

荒野の旅記憶を連綿と受け継ぐ民にとって、平等で敬虔な生き方は理想であった。だからキリスト者は「民衆全体から好意を寄せられた(使徒 2:47)」。だが一方で「すべての人に恐れが生じた(2:43a)」。キリスト者は自分が恐れる者であるだけでなく、周囲から「恐れられる」存在でもあったのか。「多くの不思議な業とするしを行っていた(2:43b)」がゆえに、イエスのように恐れられたのかも知れない。

不定住のイエスは、弟子に所有放棄の生き方を求めた(ルカ 12:33,18:22)。その後、弟子たちは亡師の命令に従って定住し(1:4)、財産は無所有から共有になった。そのことで特殊な弟子集団は、すべての人に開かれた教会へと変化する。道を求める者にペトロは、「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい(使徒 2:38)」と教えた。ただこれだけの入門儀式。やがて教会は全世界、全民族、全階層に広がり(2:39)、財産の共有は不自然になっていく。

キリスト者は心をつにして神殿で伝統的な礼拝をし、「家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美した(2:46~47)」。修道院のような弟子集団ではない。それぞれの家で普段の食事を共にし、大食漢も食が細い者も各々満足し、互いをそれでよしとする穏やかな日々。これはイエスの直弟子、使徒の教えであった(2:42)。教会は人間の集まりであるゆえ、人間的な誤解や諍いが生ずるが、それに優先するのが「赦しの洗礼と賜物としての聖霊(2:38)」。このことが私たちの中心。財産を共有していようが、個々人で私有していようが、変ることのない教会の土台である。

「すべての人に恐れが生じた(2:43)」。直訳すれば「すべての魂に」。キリスト者は一人ひとり、魂の深さで「恐れる(畏れる)」。「喜びと真心(2:46)」の日々において、神の「不思議な業とするし(2:43)」に触れて恐れる。十字架のとてつもない愛と赦しを、復活の命の驚くべき力を、魂の深さで畏怖する。恐れとは、人間を超えている神の働きの自覚。神の息吹、聖霊の風を己に感ずる瑞々しい決意である。

「恐るべき支配の力を神は御もとにそなえ~その光はすべての人の上に昇る(ヨブ 25:2~3)」。遠い昔からこれは自明なことであった。この普遍的な真実は、日々の祈りの中で己が身となる(使徒 2:46)。



【おまけのひとこと】

鳥肌がたつような恐れは心の表層に過ぎない 魂の恐れとはどのようなものなのか 悔い改めと充実が混じり合った 私の髄からの微動 そよ風が 草花をそれぞれに揺らしている被造世界の振動